

ひのえうま出生減の歴史人口学的考察

吉川 徹 (大阪大学)

ひのえうま(丙午)は十干十二支のひとつで、60年周期で訪れる。次の令和のひのえうまは、来年2026年に迫っている。江戸期以降の日本社会において、この生年の女性の気性や運勢にかんして「気が強い」「夫を食い殺す」などという俗言が広まり、当該年の出生数減や女兒に限った忌避、当該生年の女性が長じてからの婚姻厄難という現象が生起した。この社会現象の構造は十分に知られていないため、本報告ではまず、議論の前提となるひのえうま現象の概要を述べる。

本報告の分析対象は、1846年の弘化のひのえうま、1906年の明治のひのえうま、1966年の昭和のひのえうま、そして2026年の令和のひのえうまに定める。これら4度のひのえうまについては、人口統計データを得ることができるので、これらからそのときどきの出生減の特性を検討する。

1846年の弘化のひのえうまについては、出生時の人口動態統計データが存在しない。そのため1886(明治19)年の人口統計を用いて40歳前後に至った時点での性年齢別人口が検討されてきた。ここからはまず、周辺年において性比に偏りがある(壮年に至っても依然として男性比率が高い)ことから、女兒に対して恒常的な嬰兒密殺(間引き)がなされていた時代状況がわかる。そのうえで当該年には、女性のみならず男性の実数も前後年より少ない。このことからひのえうまを控え、受胎回避および(性別不明段階での)堕胎がなされていたことがわかる。さらに、前後の年の性比の推移において女性比率に山一谷一山の歪みがみられることから、前年および後年に出生時の祭り替え(出生時における生年変更)、もしくはごまかし(データ収集時点における出生年の虚偽申告)がなされたことが推定される。そして、それを考慮してもなお当該年の女兒出生が少ないことから、ひのえうまを理由とした女兒の間引き(嬰兒密殺)がなされたことがわかる。(黒須1992、Ishise 2024、Rohlf et. al. 2010)。

1906年の明治のひのえうままでは、直前に日露戦役があり父親となるべき男性が数多く出征していた。その影響で3年間にわたり男女を問わず出生減が生じており、当該年の出生減の規模は比較的小さい。さらに前後の年の性比の推移において、やはり女性比率に山一谷一山の歪みがみられることから、前年および後年に出生時の祭り替えがなされていることが確認できる(呉1911)。当該年の男児の数が前年よりわずかに少ないことについては、受胎回避であったのか、日露戦役の影響であったのか判断が難しい(村井1968、Ishibe 2024)。

1966年の昭和のひのえうままでは、マスメディアの発達とひのえうまに関する情報の拡散、寿命の伸びによる前世代の生存、前回のひのえうま女性の婚姻厄難の大きさ、そして受胎調節実地指導の普及などの要因の複合作用により、人口ピラミッドに深い切り欠きが残った。ただし、周辺年において性差に全く偏りがみられないことから、女兒に対する選択的な力が加わっていない。さらに、前後の年に男女を問わず出生数が多くなっており、著しい山一谷一山の推移がみられる。このことから、受胎調節(避妊)によって前後の年に出産前倒しと出産先送りがなされたことがわかる。そして、ひのえうま忌避による純粋な出産断念は約16万人と推定される(吉川2025)。この昭和のひのえうまについては、出生時の大規模な人口減にとどまらず、その後の人生経過においてコーホートサイズの少なさが、学齢期、進学・就職機会、婚姻機会などにどう作用したのかもデータから確認できるので、本報告ではこのことにも触れる。

最後に、それぞれの時代のひのえうまにおける出生抑制手段の変遷、同年人口減の規模とインパクトにかんする知見をもとに、令和のひのえうまについて検討を行う。

(キーワード：ひのえうま、人口動態統計、出生抑制)